（様式１－１）

令和６年度　学校評価報告書

大牟田市立高取小学校　　ＮＯ１

学校教育目標	自他を大切にして学び合い、心豊かで、たくましい児童の育成	重点目標	よく考え、よりよく表現する子供

評価計画				自己評価		学校関係者評価		改善計画
	重点目標	目標達成のための方策（取組指標）	成果指標	評価	結果（成果○と課題△）	評価	コメント	次年度における改善策（案）
重点目標に対する評価	学力の向上 ○授業づくり ○学力基盤づくり	○単元構成全体を見通した授業実践 ・「教える・考える」時間の軽重	○最後まで自分で考えながら取り組んだ子供 【目標】授業評価アンケート③3.2以上/４段階	3	○各学級の実態に応じた担任外職員の活用により、複数の職員で協働的な授業実践ができた。そのため、個に応じた指導・支援も推進することができた。 ○学習支援ソフトやタブレットドリルを日常の授業や朝の活動で利用し、友達との交流や基礎・基本の定着を図ることができた。 △自分づくり部会や職員全体で、学力の現状について把握・分析し、目標設定や授業改善につなげる仕組みづくりが必要である。	A	・学校評価は適切である。 ・タブレットの活用は有効であるが、基礎基本（読み・書き・計算）ができていないと積み重ねが厳しい。読書や新聞活用等で読解力向上を図ってほしい。 ・担任と複数の職員の方々の授業により、個に応じた支援ができたのがすばらしい。 ・授業時間数の制限等で、充実した授業ができにくくなっているのではないか。	・学力の分析評価が停滞しないよう、各学期において中間評価と最終評価を全職員で行う。そのねらい・内容と方法を基礎・基本部会で事前に計画する。 ・ワークショップ型研修等により、全教室での具体的な共通実践やねらいを焦点化した授業構想について、職員同士で検討する。
		○個に応じた授業実践 ・少人数授業,個別の指導・支援の推進	○自分で問題を解けた実感をもつ子供 【目標】生活アンケート「学習意欲」0.8以上/1.5	3		A		
		○ICT を活用した協働的な学習 ・学習支援ソフト(タブレット)を使った考えの交流	○ICT を活用し考えを広め深める子供 【目標】授業評価アンケート⑧3.2以上/４段階	4		A		
		○学力向上プランに基づく実践と点検 ・自分づくり部会での評価改善	○調査に表れる教科に関する学力向上 【目標】12月学力調査　標準スコア昨年度比3p以上アップ	2		A		
	心の育成 ○自分づくり ○関係づくり	○学級力アンケートに基づく実践と分析 ・関係づくり部会での評価改善	○学級や学校のために持ち味を生かす子供 【目標】生活アンケート「自己概念」0.8以上/1.5	3	○研究発表会を軸に、各学級で学級会を積み重ねることができた。児童の学級への愛着の高まりとともに学級力アンケートの結果が年間を通して上昇した。 ○児童が、自分たちの学級の問題を見いだして話し合うことが増えた。集団の一員として、目標をもって自分の役割をやり遂げることができている。 △各学年１学級であることも理由の一つとして、友達関係の固定化が生まれている。様々な友達の持ち味や特長を理解し、見方を広げる必要がある。	A	・学校評価は適切である。 ・研究は教師にとっては大変だが、児童にとってはその分の成果となって表れている。特に自己肯定感や他者への思いやりなどが数値として上がっている。 ・他学年や他校との交流など、つながりをもてる活動が必要と考える。 ・よくいうと優しい子供であるが、周りに気を遣い過ぎる子供が多くなった気がする。友達の体や心を大切にする学級づくりを続けてほしい。	・異学年交流や幼保・小小・小中連携を促進し、関わりを広げる。 ・教師がリフレ-ミングを活用して助言し、児童同士では気付けないよさを理解できるようにする。 ・学級力アンケートの項目を重点目標や学級目標を基に学校化・学級化し、学級経営の成果や課題を目標に沿って分析する。
		○自発的・自治的活動の充実 ・学級活動（１）の学習過程の積み上げ	○決めた目標へ力を合わせて取り組んでいる学級 【目標】学級力アンケート「やりとげる」3.5以上/４段階	4		A		
		○児童の言葉を尊重した学級経営 ・教師の発言の減少→児童の話合いの増加	○教え合い・支え合いをしている学級 【目標】学級力アンケート「支える」3.5以上/４段階	4		A		
		○特別支援教育や人権・同和教育の視点からの生徒指導 ・根拠や理由を添えた納得できる指導	○友達の体や心を大切にしている学級 【目標】学級力アンケート「安心」3.5以上/４段階	3		A		
	体力の向上 ○授業づくり ○体力づくり	○体力を高める授業実践 ・ICT を活用した動きを高める場づくり	○個人のめあてづくりと振り返り 【目標】体育の時間100%	4	○自分のめあてをもたせ、友達と関わりながら活動し、授業の最後には、友達のよさや自分の伸びを振り返る時間を設定することができた。 ○夏場の昼休みには、保健委員会の児童が熱中症予防のために啓発の放送をするなど、健康安全に対する自治的な活動を進めることができた。 △委員会活動を活性化させ、体力を高める取組や残食を減らす取組など、児童のアイデアを生かして計画・実践していくようにする。	A	・学校評価は適切である。 ・残食や体力面と学習面は関係が深いので、体を動かしたり残食を減らしたりする取組を継続してほしい。 ・残食に関しては、家庭を巻き込んで食育を推進する働きかけをする必要がある。 ・体力向上と兼ねて心の育成のためにも、集団スポーツの取組を進めていくこともいいと考える。 ・ボランティア等で学校へ行くと、夏はしっかりと熱中症対策をしている。学校行事等で体力向上もできている。	・体力向上プランに、集団での体力づくりの取組を掲げ、校内特活部会で協議・計画・評価する。 ・体力向上に関する自治的・自発的な活動を計画的に進めるために、各委員会活動において、学期始めの児童から意見収集、学期末の振り返りと次への見通しの時間を位置付ける。
		○体育委員会による体を動かす取組 ・年２回の高取スポーツフェスタの実施	○体を動かすことが好きな子供 【目標】児童評価アンケート95%以上	3		A		
		○保健室・保健委員会による周知・啓発 ・保健月目標に向けての取組の計画・実践	○自分で安全な行動ができる子供 【目標】保健室利用率　昨年度減	4		A		
		○給食室・給食委員会による周知・啓発 ・給食月目標に向けての取組の計画・実践	○残さずに食べる健康な子供 【目標】給食残食率　１学期→３学期減	3		A		
いじめ防止	○いじめをしない・許さない子供	○発達支持的生徒指導の充実 ・学級活動（１）（２）（３）の計画的実践	○意思決定したことを徹底する学級 【目標】学級力アンケート「きまり」3.5以上/４段階	3	○生活アンケートや日常的な表情や行動の観察から、早期発見・早期対応に努めることができた。 ○案件について、担任一人で抱え込むことがないよう情報を共有し、複数の職員や関係機関とで迅速に丁寧に対応することができた。 △いじめの未然防止に係るよりよい人間関係や土壌づくりについて、児童自らが話し合って実践できるよう働きかける。 △いじめに関する法律や基本方針等について、より一層理解を深め、保護者と共通認識の下で取り組む。	A	・学校評価は適切である。 ・いじめの認知件数があがっているし、組織的に対応できていて、とてもスムーズにいっている。 ・教師に対する子供の行動も気になる。保護者の責任もあるので、保護者･教師・家庭が一丸となって関係を築く働きかけをする必要がある。 ・子供の表情や行動から早期発見や対応ができたことが評価できる。 ・いじめの認識を浸透させていってほしい。	・児童や教師が学級の問題提起をして話し合い、いじめを許さない規範意識を醸成する。また、話合い活動で異なる意見や本音を評価し、同調圧力を緩和する。 ・専門機関や有識者を講師として招聘した校内研修や PTA と連携して保護者と一緒に学習する講習会等を計画する。
		○いじめの早期発見 ・月１回の生活アンケート、相談ポストの活用	○生活アンケートに基づく面談実施 【目標】いじめ認知　昨年度増	4		A		
		○いじめへの組織的対応 ・SC,SSW 等の指導・助言からの役割分担	○いじめ解消に向けた対応の継続 【目標】いじめ解消１００％	3		A		
		○いじめに関する校内研修・対策委員会の実施 ・各部会や委員会における事例検討	○いじめ防止に関する職員の理解及び対応力の向上 【目標】教師の教育活動評価　3.2以上/４段階	3		A		
不登校対策	○学校に行くのが楽しい子供	○校内支援センターの運営 ・活用計画の作成と見直し(学期１回)	○配慮が必要な児童の居場所の設置 【目標】不登校及び不登校兆候児童 昨年度減	4	○SC との面談や SSW との情報交換等を行い､個々の事例に対するアプローチについて、専門的視点からの助言を基に、対応をしている。 ○児童や保護者の思いを受け止めながら、校内教育支援センターを中心に、不登校兆候児童の居場所づくりができている。 △高学年を中心に、楽しい学校生活づくりに参画できる取組や支援をしていく。また、多様な人・もの・ことに触れる体験的な活動を充実させる。	A	・学校評価は適切である。 ・不登校の居場所づくりや専門機関との連携がうまくいっているのがとてもよい。 ・様々な体験が児童の成長を促すので、体験学習の充実をお願いしたい。 ・不登校の原因は様々にあると思うので、まずは PTA も協力して楽しい学校を目指したい。 ・SC や SSW の関わりが必要。子供、保護者共に SC 等と話す機会があればいい。	・安心して過ごせる温かな校内教育支援センターの整備とともに、児童自身に意思決定させながら個に応じた指導・支援を促進する。 ・総合的な学習の時間のまとめの発信や児童のアイデアや提案の実現ができるよう、まち協や校区の施設等へ協力を依頼し、地域を巻き込み、地域とつながる。
		○不登校に対する関係機関との連携 ・SC,SSW 等との情報共有、事例対応	○保護者との合意形成を踏まえた対応 【目標】不登校児童の関係機関とのつながり１００％	4		A		
		○魅力ある学校生活づくり ・児童の意見を反映させた児童会活動・学校行事等の実践	○学校に行きたいと思う児童の増加 【目標】生活アンケート「登校意欲」0.9以上/1.5	3		A		
		○ESD の推進(SDGs11,15,17 の浸透) ・総合的な学習の時間の評価修正	○学習における校外施設や人材の活用 【目標】各学年２回以上	3		A		
働き方改革	○働き方を見直し、実践できる教師	○月ごとの働き方の振り返りと意識改善 ・月末の超過勤務状況の周知	○超過勤務削減のための目標設定と実践 【目標】教師の教育活動評価　3.2以上/４段階	3	○衛生推進委員会で、本校や職員自身の超過勤務の実情について把握することができた。 ○水曜午後の活用について、研修・会議と学級事務の時間確保を調整しながら計画・実行できたため、週１回の定時退校をする職員が昨年度よりも増えた。 △協議した取組について、全職員での共通実践として浸透・継続させることが不十分だった。 △見通しをもって業務を行えるよう年間計画を共有し、年休取得を一層推進する必要がある。	A	・学校評価は適切である。 ・先生方の体調不良等に影響が出ている働き方があれば改善していく必要がある。そのためにも学校へのサポート体制が必要である。 ・現在働く先生の健康のために、将来先生を目指している人のためにも残業減・年休取得の推進ができればいい。 ・大きな課題であるが、昨年度から１割減の達成は評価できる。まだまだ働き方改革の促進が必要。	・協議した取組を定期的に見直し、継続可能の視点から絞った実践を徹底していけるよう、職員同士で声をかけ合う。また、その成果を可視化していく。 ・児童の成果と課題を整理し、目的から優先する業務を順序づけし、これまでの働き方や考え方を見直す。
		○定時退校一覧の作成 ・定時退校日の週１回設定と黒板掲示	○超過勤務時間の削減 【目標】超過勤務時間　昨年度２割減	3		A		
		○衛生推進委員会による業務整理 ・隔月１回の業務改善に関する協議	○業務の仕分け、働きやすい環境整備 【目標】教師の教育活動評価　3.2以上/４段階	2		A		
		○計画的年休の取得 ・行事予定への年休取得日の位置づけ	○先を見通した計画的な業務遂行 【目標】全職員年間８日以上年休取得	3		A		

◇　評価について　【自　己　評　価】　４：目標達成（９０％以上）　３：ほぼ達成（７０％～９０％）　２：もう少し（６０％～７０％）　１：できていない（６０％未満）

【学校関係者評価】　Ａ：自己評価は適切である　Ｂ：自己評価は上方修正すべきである　Ｃ：自己評価は下方修正すべきである